九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

グリムのメルヘン「いばら姫」(KHM 50)解釈について：その文献学的，教育学的考察

岡本，英明
九州大学大学院人間環境学研究科国際教育環境学講座 ： 教授 ： 教育人間学

https://doi.org/10.15017/980

出版情報：大学院教育学研究紀要. 3, pp.107-129, 2001-03-30. 九州大学大学院人間環境学研究科発達・社会システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2000，第３号（通巻第46集），107-129
Res. Bull. Education, Kyushu U., 2000, Vol.3, 107-129

グリムのメルヘン「いばら姫」(KHM 50)の解釈について

── その文献学的，教育学的考察 ──

岡　本　英　明

I

『グリム童話集』("Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm." 以下ＫＨＭと略記）の中の「いばら姫」(Dornröschen) は，1810年のＫＨＭ祖稿（エーレンベルク手稿），1812/1815年の初版及びそれ以後1857年の第七版（最終版）までの全ての版のテクストに掲載されていて，かつテクスト変更が為されている21話の一つであり，全部で200話あるグリム童話集の中でも特によく知られた愛らしい，子ども向きのメルヘンであるが，しかし決して解釈が容易なメルヘンではない。「この美しい，しかしドイツでは昔は必ずしも非常に流布していたわけではないと思われるメルヘンは，文学者たちの関心を掻き立てたのみならず，その古代的なモティーフによってもまた研究者たちの注意を引いた」(1)と言われるように，これまで数多くの研究者たちがこのメルヘンの起源や原型，文体などについて様々な解釈を試みて来ている。

「いばら姫」の梗概は，周知のように，以下の如くである。すなわち，昔々王様とお后が子宝を切望していたが，あるとき水浴びをしていたお后に，蛙［ＫＨＭ第二版（1819年）まではザリガニ］が「あなたの望みはかなえられます」と王女の誕生を予告する。この予告どおり，やがてお后は女の子を産む。王様は喜んで王女生誕を祝賀する大宴会を催して，12人の賢い女たち（die weisen Frauen）［1819年版までは妖精（Feen）］を呼んだが，それに招待されなかった13番目の賢い女が，王女は15歳になったら糸巻きの紡錘（つむ）が刺さって死ぬと呪いをかける。しかしまだ自分の祈願を言わずにいた12番目の賢い女が，この死を百年の深い眠りに変える。15年目に予言は的中し，王女と一緒に城に住んでいる全てが魔法の眠りに陥り，城の周り一面に茨垣が生い茂る。その丁度百年後に一人の王子が勇敢に茨垣を通り抜けて進入して，眠れる姫をキスによって目覚めさせ，喜ばしい結婚式が挙行される。

この「いばら姫」メルヘンは，ＫＨＭ祖稿（1810年）の筆跡とその文末の「口伝え」(Mündlich) という注意書きから明らかなように，兄のヤーコプ・グリム (Jacob Grimm) が提供者の話をスケッチ風に筆記したもの（**図１**参照）(2)が最初である。さらに1812年の初版の著者保存本の中で弟のヴィルヘルム・グリム（Wilhelm Grimm）が「マリーから」("von der Marie")(3)と自筆で書き入れていることから，この話の提供者はともかくマリー（Marie）であることが判明している。

ところでこのマリーは，ヴィルヘルムの長男のヘルマン・グリム（Herman Grimm）の証言[4]によって19世紀末以来，カッセルのヴィルト（Wild）薬局の家政婦の「マリー婆や」（“Alte Marie”）だと長らく信じられて来た。この「マリー婆や」ことマリー・ミュラー（Marie Müller，旧姓 Clar，1747-1826）は生粋のドイツ人（ヘッセン生まれ）であったので，ヤーコプが彼女から聞いた「いばら姫」も生粋のドイツの民話（Volkserzählung）であると考えられて来た。無論，既にＫＨＭ祖稿の「いばら姫」のテクストの末尾にも後ほどヤーコプが別の書体で「これはペロー（Perrault）の眠れる森の美女から全く由来する（または移された）ように思われる」[5]と書き加えた補遺もあり，さらにその後ヴィルヘルムはこのテクストを書き換えて行く中で幾重にもフランスのペローの「眠れる森の美女」（La belle au bois dormant，1697年）の話に同化させているのであるが，しかし注目すべきことに，このドイツ版の「いばら姫」には，ペローの話の後半部，すなわち姑による王女とその二人の子どもへの迫害という続篇がＫＨＭ祖稿から最終版に至るまでの全ての版のテクストに書かれていない。

以上のことから，例えばペッチュ（R. Petsch）は1917年に次のように推論している。「周知のごとくこのメルヘンは，少なくともヴィルト家の「マリー婆や」がグリム兄弟に伝えたような形ではドイツの民衆の言葉では必ずしも特に頻繁には存在しておらず，そしてさらに以前の数世紀にも我が国では証明され得ない。そういうわけで，我々は直ちにゲルマン古代に溯って，眠れるヴァルキューレ［戦死者の霊をヴァルハラ天堂に導く戦いの乙女］がジグルト（Sigurd）によって目覚めさせられる北欧の物語を引き合いに出さなければならないだろう。それは既にヤーコプ・グリムがやったことである。」[6]

ここからペッチュは，「マリー婆や」がヤーコプに語った「いばら姫」は古代北欧神話・英雄伝説の『エッダ』（Edda）と関連があるのに反して，ペローの話の後半部（姑モティーフによる相互連関のない拡張）は別のメルヘンの型を付け加えたものであり，「いばら姫」はペローの長い話の短縮ないし断片でもなく，後者が前者の有意義な拡大でもないとしている。何故ならば，「もし仮にこのメルヘン［「いばら姫」］が当時既に姑による迫害という続篇を有していたとすれば，きっと何かがブリュンヒルト（Brynhild）の運命のさらなる形成へと移行したであろう」[7]。しかるに，ブリュンヒルトの運命と「いばら姫」メルヘンの結末とは何の関係もない。「いばら姫のタイプでは，そうした迫害に対して何の根拠も存在していない。それはそれ自体で完全であり完結しており，そしてこうした真正の形態において我々の英雄伝説に作用を及ぼしたのである」[8]として，ペッチュは「いばら姫」が英雄伝説『エッダ』に移植されたのであって，つまりメルヘンが神話に先立つのであり，その反対ではないと結論付けている。また，ルトガース（H. W. Rutgers）も1923年に，ペローや後述するバジーレ（G. Basile）のメルヘンが救出された女とその子どもたちの運命を語っている部分は相互連関のない継続だと思われるので，ドイツの「いばら姫」が不完全なのではなく，むしろ反対に，ペローやバジーレのメルヘンよりも根源的な形であるとしている[9]。

さらにヴェッセルスキー（A. Wesselski）もご多分に洩れず，マリーをヴィルト家のマリー婆やと信じて疑わず，1931年に次のように述べている。「ところで，カッセルのヴィルト薬局の乳母で

グリム兄弟への提供者である「マリー婆や」は，ペローのメルヘンもオーノワ夫人（Madame d'Aulnoy）のメルヘンも確かに知らなかった。しかし彼女は両者のメルヘンを人が話すのを聞いていたかもしれない。だから，この二つのメルヘンを混淆したのが彼女であったということも，必ずしも初めから除外されない。しかし，もっとありそうなこととして仮定されなければならないのは，こうした混淆が彼女の先輩に由来し，マリー婆やはこの新しいメルヘンを良き保護者として覚えていたということである。」[10]

II

ところが，ようやく1975年になってレレケ（H. Rölleke）が画期的な論文[11]においてマリー旧説を粉砕して，マリーは実はヴィルト家のマリー婆やではなく，ハッセンプフルーク家の若きマリー嬢（Marie Hassenpflug, 1788-1856）[12]であることを初めて立証した。この立証から，ヤーコプが書き取ったＫＨＭ祖稿の「いばら姫」は，マリー婆やではなく当時20歳そこそこの若きマリー嬢が語ったメルヘンであることが判明した。このマリー嬢の母方はフランスのユグノー派の出身であり，したがって，マリー嬢はフランスの文化とフランス語が支配する家庭で育ったのである。それ故，彼女はフランスのペローのメルヘンやオーノワ夫人のメルヘンを幼少の頃から知っていた。例えば，「いばら姫」の冒頭でお后に受胎を告知するのは，1825年のＫＨＭ小版（Kleine Ausgabe）以後 ── 大版は1837年のＫＨＭ第三版以後 ── 蛙（Frosch）になっているが，1810年の祖稿と1812年の初版と1819年の第二版ではザリガニ（Krebs）である。これは，1697/98年のオーノワ夫人の『新しい物語集あるいは現代風の妖精たち』(Contes nouveaux ou Les Fées à la mode）の第１巻第３話「森の雌鹿」(La biche au bois）から直接由来したものである。このペローやオーノワ夫人の妖精メルヘンの内容は，1637年のイタリアのバジーレの『ペンタメローネ』(Pentamerone）の第五日第５話「日と月とターリア」(Sole, Luna e Talia）に溯り，さらには1340年のフランスのアーサー王物語『ペルスフォレ』(Perceforest)[13]にまで溯る。

以上を要するに，グリム童話の「いばら姫」はドイツの生粋の民話ではなく，「19世紀初めの趣味に合わされてドイツの雰囲気に浸された17世紀末のフランスの，とりわけペローやオーノワにおいて出会うような妖精メルヘンである。(中略)私はそれによって請求された語り換え(Umerzählen)を，とりわけ必ずしも専らグリム兄弟の責任に帰したくはない。大抵のものは，やはりその直接の提供者たち（つまりここではマリー・ハッセンプフルーク）に，あるいは提供者たちがそこから話を知った語り手たちに遡及され得るように思われる」[14]とレレケは述べている。このレレケの立証によって，上述したペッチュ，ルトガース，ヴェッセルスキーなどの推論はすべて根底から覆るわけである。

かくして，ペッチュやルトガースの推論とは反対に，ドイツ版の「いばら姫」はペローの「眠れる森の美女」の後半部が欠落したものであることが明らかとなる。しかし勿論，ドイツ版がペローの前半部と全く同一というわけではない。例えば，お后に受胎を告知するザリガニも蛙もペローに

は登場しないし，また，ペローでは王女誕生の大宴会のための食器は七人分しかなかったが，ドイツ版では「十二枚の金の皿」しか持っていなかった，と変化している。この12という数の謂れについて，例えばガイガー（R. Geiger）は，昔の宮廷生活は太古の聖なる数の12，すなわち「黄道十二宮」[15]に基づいていたからだ，と説明している[16]。またシュタウフ（Ph. Stauff）は，13番目の妖精の排除に，ゲルマン人が長い冬の夜の続く極北の原住地にいた時代に用いた13カ月の太陰暦年（Mondjahr）［月の満ち欠けの周期（朔望月）は28日なので太陰暦年は13カ月となる］から太陽が一年中照る現在地へ民族移動して用いた12カ月の太陽暦年（Sonnenjahr）への移行を見て，それ故に「これ［いばら姫メルヘン］は，既に極北において成立したのではなく，ゲルマン人が既に我々の緯度にあって，太陰暦年から太陽暦年へと移行した時に初めて成立したのだ」[17]としている。

他方，ロマイン（A. Romain）によれば「簡素な市民や農民の世帯の尺度によれば，一世帯は祝宴用の「上等の皿」を１ダースしか持っていない」[18]のであり，レレケも「典型的にビーダーマイヤー（Biedermeier）的な特徴は（中略），当時は（中産階級の）嫁入り支度は無条件に12枚の食器から成り立っていたことである」[19]と指摘している。その他にペローと違ってドイツ版では例えば，正しい王子が近づくと茨が花［野ばら］になって道を開け，そしていばら姫は王子のキスによって百年の眠りから目覚める。

ところで，ドイツ版におけるペローの後半部の欠落は一体どうして生じたのであろうか。マリー嬢または彼女に話を伝えた語り手が後半部を忘れたのであろうか，それともグリム兄弟が子どもたちへのいわゆる教育的配慮から省いたのであろうか。これに関して，ベーレントゾーン（W. A. Berendsohn）は既に1921年に，「［いばら姫の］第二部が消滅していることもまた，子ども向けの話としての用途に遡及され得ることが可能である」[20]と述べ，シェルフ（W. Scherf）も1995年に次のように述べている。「ヴィルヘルム・グリムは，いばら垣で取り囲まれた眠れる少女［いばら姫］に，オーディン（Odin［北欧神話の最高神］）の眠りの茨によって魔法の眠りに陥り炎の壁によって護られたブリュンヒルトを見たので，彼はバジーレ（日と月とターリア）とペローに見出される人食い姑による迫害についての第二部を分離して，それを1812年に独自の話（84番：「お姑さん」［Die Schwiegermutter］）として使用し，後にはそれを全く註の中へと追放した。」[21]さらにディーデリヒス（U. Diederichs）も同様に，「いばら姫の第二部を彼ら［グリム兄弟］は分離して，それに「お姑さん」（1812年）という題名を与えた」[22]と述べている。

確かに，ＫＨＭ初版第１巻（1812年）の註（グリム兄弟が共同で執筆した）[23]の「お姑さんについて。No. 84」には次のように書かれている。「ペローの眠りの森の美女の一部分と一致する。――ペンタメローネの V. 5.（日と月とターリア）では，嫉妬深い妻が彼女の競争相手をその二人の子どもたち諸共煮るために，まさにそのように料理番を呼び出させる。しかし冒頭はここではいばら姫におけるように危険な紡錘（つむ）によっており，そして両方の話の相互間の移行は特に見事であり新しい。」[24]さらに，この「お姑さん」が要約されて註に移された1822年のＫＨＭ第二版第３巻（註釈版）の「断片 Nr. 5 悪いお姑さん（Die böse Schwiegermutter）」では，「ペローとバジーレ（ペンタメローネ5. 5）におけるいばら姫のイタリアとフランスのメルヘンは，その結末において本

篇と一致する。しかしこの結末はドイツのメルヘンには欠落している。註の No. 50を参照」[25]と書かれている。

したがって既にグリム兄弟も，「お姑さん」の話は断片的ではあるが，ペローの話の後半部である可能性に気付いていた。それ故にグリム兄弟が，元のペローとバジーレのメルヘンを故意に前半部と後半部に分離して，北欧ゲルマン伝説に起源をもつと考えられる前半部だけを「いばら姫」メルヘンとして独立させ，他方の後半部をそれから切り離して「お姑さん」と題してＫＨＭ初版には掲載したが，断片のため1819年のＫＨＭ第二版以後は註釈本の「断片 Nr. 5 悪いお姑さん」に要約のみを載せたのだという推論が出てくるのも無理はない。

しかるに極めて注目すべきは，ヤーコプが「いばら姫」を若きマリー嬢から聞き書きしたのは，当然ながらヤーコプがブレンターノ（C. Brentano）にＫＨＭ祖稿を送付した1810年10月17日より以前であり，1808年頃[26]であるのに対して，「お姑さん」は，1812年のグリム兄弟の筆者保存本の中のヴィルヘルムの自筆の書き込みによれば「1811年４月18日，ハッセンプフルーク家の人々から」[27]聞き取ったものだという事実である。また，前者の「いばら姫」は既述の如くヤーコプが若きマリー嬢から聞き書きしたものであるのに対して，後者の「お姑さん」は「ハッセンプフルーク家の人々から」とあるから，同家のマリー（Marie, 1788-1856），ジャネッテ（Jeanette, 1791-1860），アマーリエ（Amalie, 1800-71）の三姉妹の中の誰かから聞き書きしたものである。

したがって，以上のような事実から明らかなように，この二つのメルヘンはグリム兄弟に同じ時に一度に語られたのではなく，三年ほどの時間的距離を経て別々に提供されたものなのであって，決してグリム兄弟自身がこの二つのメルヘンを切り離したのではない。

Ⅲ

1815年のＫＨＭ初版第２巻の序文の中で，「実際これらのメルヘンの深遠な内的価値は高く評価されるべきである。メルヘンは我々の太古の英雄文学に新しい，そしてそれ以外にはどこからも成就され得ないような光を投げかける。紡錘（つむ）が刺さって眠り込むいばら姫は，茨によって眠り込まされたブリュンヒルト，つまりニーベルンゲンのではなく，古代北欧のブリュンヒルトなのである。（中略）これらの民間メルヘン（Volksmärchen）の中には，失われてしまったと思われた混じり気のない生粋のドイツの神話が横たわっている」[28]とヴィルヘルムが述べているように，神話の中にメルヘンの源泉を認めて，メルヘンの中に古代の神話（Mythos）や叙事詩（Epos）が最も純粋に維持されていると考えていたグリム兄弟にとっては，この「いばら姫」メルヘンはとりわけ重要なものであった。というのも，彼らはこのメルヘンに，ブリュンヒルトの魔法の眠りをめぐる古代ゲルマン神話 ── グリム兄弟は共同で1815年に『エッダ』の中の英雄伝説を手稿から編集し，左ページに古代アイスランド語の原詩，右ページにドイツ語の対訳，さらに脚注と巻末に付録としてドイツ語による散文訳を加えて出版した[29] ── のドイツ版を見て取ったからである。

これに関してグリム兄弟は，既に1812年のＫＨＭ初版第１巻の「いばら姫」の註において，次の

ようにコメントしている。「王子が彼女を救い出すまで城の中で茨の壁に囲まれて眠っている乙女は，それを通り抜けてジグルトが突き進むあの炎の壁が取り囲んでいる眠れるブリュンヒルトと，その点では一致する。」[30]また，この初版の著者保存本第1巻には上記のコメントの右空欄に，筆跡から見てヤーコプの自筆で「彼女［いばら姫］が自分に刺してしまう紡錘＝オーディンがブリュンヒルトを刺す眠りの茨」[31]という補筆がなされている。

さらに，KHM第二版の註釈本（1822年）の註50「いばら姫」において，グリム兄弟はこの補筆を採用して，「ヘッセンから。茨が彼の前に譲歩する正しい王子が救い出すまで茨の壁に囲まれた城の中で眠っている乙女は，古代北欧伝説によれば炎の壁が取り囲んでいる眠れるブリュンヒルトである。彼女が自分に刺してしまって眠り込む紡錘（つむ）は，オーディンがブリュンヒルトを刺す眠りの茨である。ペンタメローネ（V.5）では，それは亜麻に混じっていたトゲである。ペローでは，眠りの森の美女」[32]と書いている［下線部は，原文ではゲシュペルト（隔字体）］。

古代北欧神話・英雄伝説『エッダ』の中の「ファーフニルの歌」（Fáfnismál），「ジグトリーファの歌」（Sigrdrífomál），「ブリュンヒルトの冥府への旅」（Helreið Brynhildar）と，『エッダ』のジグルト関係の諸詩篇を散文に書き換えて繋ぎ合わせた『ヴェルスンガ・サガ』（Völsunga Saga）において，ジグルトとジグトリーファ（Sigdrifa）［＝ブリュンヒルト］── グリム兄弟は，ミュレンホフ（K. Müllenhoff）や大多数の学者たちと同様に，北欧伝説ではジグトリーファとブリュンヒルトは元来同一人物であったという見解である ── の関係が述べられているが，特に「ジグトリーファの歌」では以下のように書かれている[33]（古代アイスランド語で書かれた原詩は，古代ゲルマン文学に特有の頭韻詩）。

ジグルトはヒンダルフィアル［牝鹿山］に馬で上り，南からフランケンの国に道をとった。山上で彼は，火が燃えているような大なる光焔を見た。それは天にまで輝き映えていた。そこに進むと楯の垣があり，軍旗が掲げてあった。ジグルトは楯の垣の中に入ってみると，そこに一人の男が完全武装して横になって寝ていた。まずその頭から兜を外した。すると，それが女であることが分かった。鎧は身体にぴったり張り付いたようになっていた。そこで彼は［名剣］グラムを使って，鎧の首の空きから下にかけ，次に両袖を縦に切り裂き，女から鎧を剥ぎ取った。すると女は目を覚まし，起き上がってジグルトを見ると言った。

「鎧を切ったのは誰。	Wer schnitt die Brünne?
どうして眠りから覚めたのでしょう。	Wie brach mein Schlaf?
青ざめた縛めを	Aus fahlen Fesseln
私から除いてくれたのは誰」	wer befreite mich?
ジグルト	*Sigurd:*
「ジグムントの子です。	Der Sohn Sigmunds:

ジグルトの剣が	Sigurds Klinge
鴉（からす）の屍肉［鎧］を	löste des Raben
たった今引き裂いたのです」	Leichenzweige.

ヴァルキューレ	*Die Walküre:*
「長いこと私は寝ました。	Lange schlief ich,
長いことまどろみました。	lange schlummert ich,
人の不幸は長い。	lang ist des Lebens Leid.
オーディンなのです,	Odin schuf,
眠りのルーネを	daß den Schlummerbann
解くことが出来ないようにしたのは」	zu lösen mir nicht gelang.

ジグルトは座って女の名を尋ねた。女は蜜酒の満ちた角杯を取り，記憶の酒を彼に渡した。

（中略）

女はジグトリーファと名乗り，ヴァルキューレであった。彼女は語った。二人の王が戦った。一人は兜のグンナルといい，すでに老齢であったが，極めて優れた勇士で，オーディンはこの者に勝利を約束した。

「もう一人はアグナルといい,	"Der andre hieß Agnar,
アウダの弟です。	Audas Bruder,
誰も彼に保護を	dem keiner zur Hilfe
与えようとはしませんでした」	kommen wollte."

ジグトリーファはその戦いで兜のグンナルを倒した。が，オーディンはその仕返しに彼女を眠りの茨［Schlafdorn］で刺し，今後は戦で勝利を決して得ることはなく，嫁入りせよと言い渡した。「けれど，それに対して私は恐れを知る人とは誰とも結婚しない誓いを立てると申しました。」

こうしたジグルトとジグトリーファ（ブリュンヒルト）に関する古代ゲルマンの英雄伝説から「いばら姫」メルヘンが生じたとするグリム兄弟の説について，その後特に19世紀末から研究者たちの間で盛んに議論された。わけてもシュピラー（R. Spiller）はその1893年の論文「いばら姫メルヘンの歴史に寄せて」[34]において，「いばら姫」メルヘンのドイツ，フランス，イタリア，ロシア，アルメニア，アラビア，インドなどの類話の徹底的な比較研究によって，グリムの説の正当性を否定して，「いばら姫」メルヘンはインドにおいて太陽神話「小さな太陽姫」[35]から発展したものであり，したがって「いばら姫」メルヘンは，インドからペルシア，アラビア，スペイン，フランスを通り

借用によってドイツへ来たのであり，茨垣（Dornenhecke）は眠りの茨からではなく，いばら姫の住まいが元来その上にあった樹木［Weißdorn（サンザシ）］から生じたのであるとしている。

さらにシュピラーは，北欧伝説と「いばら姫」メルヘンとの可能的関係について，次のように推論している。「このサガ［ヴェルスンガ・サガ］の著者が生きていた時代に，北欧では「いばら姫」メルヘンの一つの型が知られていたが，その型はペンタメローネに保存されたテクストに最も多く対応しており，そしてその類似性の故にジグルト伝説との融合を促したのである。サガの著者は，それをジグルト伝説の叙述へと引き入れた。何故ならば，このような仕方で，彼が［ジグルト伝説の続篇ともいうべき］ラグナル・ロドブロクのサガ（Saga von Ragnar Lodhbrók）への繋がりで必要とし，彼によって望まれたジグルト一族の存続が獲得され得るからである。」[36]

ちなみに，楽匠ワーグナー（R. Wagner）は主としてこの『ヴェルスンガ・サガ』を粉本として，それを自由に改変して，彼の代表作である「ラインの黄金」「ヴァルキューレ」「ジークフリート」「神々の黄昏」の四部から成る雄渾かつ壮大華麗な舞台祝祭劇『ニーベルンゲンの指輪』（Der Ring des Nibelungen）を1874年に完成させた。

なお，上述したシュピラーの説に対して1896年にフォークト（F. Vogt）は，インドの太陽神話と北欧のブリュンヒルト神話（フォークトはこの神話を，冬に固い殻の中で眠っていた植物の種［ブリュンヒルト］が，春の太陽［ジグルト］によって殻を破られて発芽する植物神話と解釈する）を共に含んだ古代ギリシア＝シチリアのターリア神話（季節神話）が「いばら姫」メルヘンの原型であると論じている[37]が，このフォークトの説とシュピラーの説は共に，上述したルトガースによって1923年に批判されている[38]。

1905年のジーフェルト（G. Siefert）の論考によれば，13世紀初めに書かれた『ニーベルンゲンの歌』（Das Nibelungenlied）の原素材は，436年にブルグント族がアッティラ（Attila）［伝説ではエッツェル（Etzel）］の率いるフン族（匈奴）に滅ぼされた史実に基づくブルグント王国伝説が，ラインフランケン地方のジグルト伝説と５～７世紀に結び付けられたものであり（これが，８世紀以来ドイツの沿岸や河口にまで押し寄せて来た北欧ノルマン族のヴァイキングによってノルウェーに渡り，そこからさらに９世紀末にノルウェーから入植したアイスランドの人々によって『エッダ』の英雄伝説や『ヴェルスンガ・サガ』となった），ジグルト（ジークフリート）は歴史上の人物ではなく，451年にカタラウヌの戦いでフン族を駆逐してブルグント王の居城のあったライン河畔のヴォルムス（Worms）地方に進軍したフランク族が持ち込んだメルヘンの英雄であって，「いばら姫メルヘンとジグルト＝ブリュンヒルト物語との一致は，残響でも変形でもなく，類同形（Analogiebildung）として，同じメルヘン類型からの借用として説明され得る」[39]という。

また同年にパンツァー（F. Panzer）は，この世のあらゆる拘束から自由なメルヘンの世界では感情や情熱が発火する摩擦面が欠けているから，メルヘンは抒情的（lyrisch）ではなく純粋に叙事的（episch）であり，その形式はつねに散文物語であるのに反して，英雄伝説は歴史とメルヘンを題材として，それを技芸（Kunst）によって韻文（詩）に改作して創られ伝達されたものであり，メルヘン，伝説，文芸作品（Dichtung）の順序は技芸による発展段階を示しているから，メルヘン

は英雄伝説に先立つとしている[40]。

1917年にはペッチュが論文「いばら姫とブリュンヒルト」において，「いばら姫」メルヘンと眠れるブリュンヒルトをジグルトが目覚めさせることとの間に如何なる関連があるのかを問うて，『エッダ』の「ジグトリーファの歌」において「いばら姫」が英雄伝説に移植されたのだと断定している。そして，「いばら姫」メルヘンの茨垣（Dornenhecke）と『エッダ』の炎の壁（Flammenwall）とが一致していないという異議に対しては，ペッチュは次のように反論している。「しかし，茨垣及びそれに類似のものを英雄伝説は必要とはしないであろう。茨垣は，北欧の英雄の概念によれば本当に眠れる女性のために十分な防御を提供したであろうか？ここに，メルヘンの特徴が英雄に相応しいものへと転換するあの内的必然性を伴って，（中略）北欧ではよく知られた，無論またメルヘンにも無縁ではないモティーフが登場する。すなわち，炎の壁を馬で通り抜けることである。」[41]また，「いばら姫」の紡錘（つむ）刺しとブリュンヒルトの眠りの茨との不一致に関しては，「[「いばら姫」の］物語全体を神話的なものへと移行する際に，紡錘（つむ）刺し（それはヴァルキューレには似合わないであろう）が北欧の魔法手段によって置き換えられたことは，何ら不思議ではない」[42]として，ペッチュは「いばら姫」と「ジグトリーファの歌」において，メルヘンの源泉を神話に見るグリム兄弟の説を逆転させて，メルヘンが神話に先立つことが例証されているとするのである。既述したルトガースも，「両方の物語の一致は非常に大きいので，［エッダの中の］目覚めの伝説は「いばら姫」メルヘンに依存しているという仮定（その反対は我々の現在の見解ではあり得ない）は拒み難いように思われる」[43]と述べている。

Ⅳ

しかるに，既に1913年にボルテ（J. Bolte）とポリーフカ（G. Polívka）は，その重要なＫＨＭ注解集の中で，グリム童話の「いばら姫」をそうした古代ゲルマンの英雄伝説から推論することは「[「いばら姫」よりも］古いロマンス語系の諸版と，ゲルマン民族での普及の少なさに直面して，相当な疑念に遭遇する」[44]と述べている。

また1958年にヤン・ド・フリース（J. de Vries）は，「我々はジグトリーファ伝説をいばら姫との関連で規定せざるを得ない」[45]として，確かにこうした関連付けの可能性は否定できないと言う。しかし彼は，この両者の結末が相異していることにも注目している。すなわち，「南の国の生まれの勇士［ジグルト］は，ルーネの彫られた抜身の剣を二人［ジグルトとブリュンヒルト］の間に横たえ，口づけはおろか抱擁もしなかった。彼はうら若い乙女をギューキの子［グンナル］に渡した」[46]のに対して，いばら姫を救出した王子はその褒美として彼女と結婚できたのである。さらに，いばら姫の場合の紡錘（つむ）とは違って，眠りの茨はブリュンヒルト（ジグトリーファ）を偶然に刺したのではなく，オーディンが意図的に刺したのであった。以上のことからド・フリースは，「したがって我々は，いばら姫メルヘンとジグトリーファ伝説との間の類似性について判断する際には，思うに非常に控えめでなければならない」[47]としている。

しかし他方においてド・フリースは，「いばら姫」と古代ゲルマン伝説はペローやバジーレなどの物語とは全く違った性格を有していることにも注意している。すなわち，ペローの「眠りの森の美女」の王子と王女の関係はエロティックに描かれており，またバジーレの「日と月とターリア」の王様に至っては，眠れるターリア姫を「寝椅子に運んで愛の果実を摘み」[48]取って，ターリア姫を妊娠させる。さらに14世紀に溯るフランスのアーサー王物語『ペルスフォレ』においても，ツェランディーネ姫は掟の女神テミスの予言によって亜麻が指に刺さって眠りに陥り，眠っている間に子どもを受胎し，その子が姫の指から亜麻を吸い出して目覚める。それ故に，「我々が眠れる乙女から粗野に処女を奪うことが［いばら姫の］「メルヘン」の元来の形式として見なしてよいとすれば，それは皮肉で卑猥がかった冗談のスタイルであろう。いずれにせよ注目すべきは，［ジグトリーファ］伝説のゲルマン型は全く別の性格を示していることである。すなわち，剣で二人を隔てたジグルトの純潔な振舞いと，グリム童話における畏敬に満ちたキスである」[49]。

こうした相異をド・フリースは，元来のケルト的モティーフが別々の道を経由してフランスとスカンディナヴィア半島に到達したことによるのだと推察している。すなわちジグルト伝説は，先住民族のケルトの伝説に特有な数多くのファンタスティックな「メルヘン的」モティーフによって，他のゲルマンの英雄伝説の類型と異なっており，したがってこの伝説は，ケルト人の偉大な文化の最盛期であったラ・テーヌ期（La-Tène-Zeit）［第二鉄器文明時代（紀元前５－３世紀）］に，ケルト的要素とゲルマン的要素とが相互に密接に接触し合ったライン下流地域において形成されたのだとされる[50]。また，アーサー王伝説はケルト神話の背景から出現したものであり，姿を変えたケルト神話の世界に他ならない[51]から，上述したフランスのアーサー王物語『ペルスフォレ』も，結局はケルト神話に由来すると言えよう。

ド・フリースによれば，「いばら姫」メルヘンは，ようやく18世紀になってドイツへ移植されたものであり，ボルテが指摘したように総じてスカンディナヴィア半島の出自でもないが故に，ジグトリーファ伝説の基礎になることはあり得ない。したがってド・フリースは，「［ブリュンヒルトの］目覚めの伝説は「いばら姫」メルヘンからは導出され得ない。両者はあるいは神話的な基本形に遡るのかもしれない」[52]として，次のように結論している。「我々の紀元の初めにケルト＝ゲルマンの境界で生じた英雄伝説がその［「いばら姫」の］基礎を形成したことは有り得るけれども，決して立証はされていない。神話への関連はほとんど確かめられない。（中略）「いばら姫」は最も愛された童話の一つである。それなのに，それは真正のメルヘンではない。その起源は霧で朦朧とした太古の昔に姿を消して，その性格は短篇小説（Novelle）と英雄伝説と神話の間で不確かに揺れている。」[53]

かくして，上述したパンツァーやペッチュやルトガースとは正反対に，「メルヘンは神話の子である。但し，神話が瀕死の中で，あるいは死後に初めてそれ［神話］によって生み出される。死に行く，あるいは死に絶えた神話は，その中で不死なるものを，未来の世代のメルヘン作家に対する遺産として地上に残したのである」[54]と述べたヴェッセルスキーと同様に，「［メルヘン］は世俗化された神話であるとほぼ言える」[55]としたド・フリースは，メルヘンが神話に先立つのではなく，

逆に神話がメルヘンに先立つという，メルヘンと神話との優先順序に関するグリム兄弟の考えに再び接近している。

レレケもまた，この「いばら姫」メルヘンが北欧＝ゲルマン伝説よりも古いとするペッチュなどの説に反対している。何故ならば，「もし仮に伝説に対応する民間メルヘンが手本として［伝説に］奉仕したのだとすれば，エッダの中の目覚めの伝説のモティーフの諸々の破損と個々の矛盾を理解することが不可能であるのも同然であろう」[56]からである。さらに，確かにヴィルヘルムは1819年以後かなり完成された「いばら姫」テクストに，『エッダ』からの小部分を取り入れて，例えば茨垣の仕上げや，それに突入する王子の盲目的な勇敢さの強調が追加されてはいるが，しかしレレケは，「いばら姫」と古代ゲルマン神話とのそうした一致からこのメルヘンが『エッダ』の英雄伝説から由来すると結論付けることにも疑問を呈している。むしろ彼によれば，時代を超えて存在する「英雄パターン」(Hero-Pattern) がこの両者の共通性なのであり，このメルヘンの直接の由来や素性，及び両者の優先順位や依存関係は不確実なのだから，「物語を再三再四そして益々ぼんやりと霧で朦朧とした太古へと逆投影して，神話や英雄伝説やメルヘンに関する証明不能な優先順位問題について無駄に論争する，あの全体として見ればやはり多分挫折した試みの代わりに，この英雄パターンの種々なジャンルに特有の刻印（それには勿論，民間伝説や聖人伝や民謡も入る）を，その条件と特性において観察するのがむしろ冷静であると思える」[57]という。

したがってレレケによれば，「様々な証拠をその仮説的な根源を睨んで後ろ向に解釈するよりも，むしろ証拠をそれにその内在的な目標型 (Zielform) を分からせるその都度の固有法則性と固有力学において見ることが推奨され得るであろう。このことは，特にいばら姫メルヘンに対しては次のことを意味している。すなわち，数世紀の経過の中でのいわゆる変容への批判が肝心なのではなく，その変容がメルヘンに相応しい (märchengerecht) か否かの分析が肝心なのである。それは1340年［『ペルスフォレ』］と1857年［ＫＨＭ第七版］の間のほとんど専ら文字による伝承のお蔭で特に提供されている。そうした前提の下でいばら姫タイプの新しい解釈は行われ得るであろう」[58]。

ちなみに，この「目標型」という概念はリューティ (M. Lüthi) から借用されたものであり，リューティによれば，メルヘンはその数世紀に及ぶ長い伝承史の中で常にまずそのジャンルに特殊な理想形態への途上にあるのであって，この「最後に到達された「目標型」(Zielform) は，場合によっては散漫あるいは個人的な原型 (Urform) よりも論理的で，首尾一貫し，発達し，完全である得る」[59]とされる。ともあれ，こうしたレレケの立場は，筆者が既に別の論文[60]で述べておいた解釈学的見方に極めて接近していると言えよう。

V

「いばら姫（野ばら姫）」(Dornröschen) という名前は，ペローやバジーレや『ペルスフォレ』には皆無なので，ヴェッセルスキーは誰からこの名前が由来するのか不明であるとしている。シェルフもまた，「いばら姫」という極めて珍しい名前の由来を解明するのは困難であると述べている。

他方ボルテ／ポリーフカは，この名前は眠れる姫を取り囲む茨垣（Dornenhecke）への関連で選ばれたのであろうと推量しているが，しかしこの名前は同時にまた1660年のグリューフィウス（A. Gryphius）の喜劇の中（Die geliebte Dornrose）に，アルブレヒト・フォン・シャルフェンベルク（Albrecht von Scharfenberg）の中（Mundirose）に，及びこのメルヘンのフィレンツェの異本の中（Rosa）にも出て来ることを指摘し，「薔薇，日，月は美の一般的なシンボルである」[61]と述べるに留まって，この姫の名前の出所を特定できないでいる。

しかるに，ＫＨＭ初版第１巻の註「いばら姫 No. 50」の箇所に，著者保存本ではヤーコプの自筆による次のような書き込みがある。「ハミルトン（Hamilton）の全くのフィクションであるフランス語のいばらの花（fleur d'epine）は，どこにも古いメルヘンに基づいていない。」[62]ヤーコプが挙げたハミルトンの物語「いばらの花」とは，アンソニー・ハミルトン（Anthony Hamilton）伯爵の「いばらの花の物語」(L'Histoire de Fleur d'épine)〈Œuvres du comte d'Hamilton, Ⅰ, Utrecht 1731〉であり，これは「いばら姫」(Dornröschen)のタイトルで1790年にドイツ語に翻訳されて，Blaue Bibliothek aller Nationen, Ⅱ（Gotha）の叢書に収められた[63]。以上のことから，「いばら姫」という名前は，ハミルトンの命名した「いばらの花」（Fleur d'épine）のドイツ語訳から採られたものであることが明らかとなる。

ヤーコプが若きマリー嬢から聞き書きしたＫＨＭ祖稿（1810年）の「いばら姫」は，勿論マリーが語ったとおりの逐語的テクストではなく，その要点をスケッチ風に記述したものであり，文体的には感動を呼ばないが，ロマインの評価によれば，「そのあらゆる短さにも拘わらず決して断片的ではなく，そして明白なことは，構成に均整がとれていないが，大衆向きに改鋳することによって自己完結した，メルヘンに相応しい形式を獲得したことである」[64]とされる。このようなヤーコプの非常に簡潔で文体的に味気無いＫＨＭ祖稿（1810年）に，やがてヴィルヘルムが手を入れて，ＫＨＭ初版第１巻（1812年）のテクストからは，間接話法を直接話法に変えたり，モティーフを深化させたり，全体の描写を細密化したりして，このメルヘンを文体的にも内容的にも生き生きとしたものにしたのである。

ＫＨＭ第二版（1819年）ではテクストの形態がさらに発展して，ロマインによれば「これ以後は音響的＝リズム的（klanglich-rhythmisch）統一が完成すると同様に，内的形態もまたヴィルヘルム自身の明瞭な本質特徴を獲得する。それは，直接的にはイェニー・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ（Jenny von Droste-Hülshoff）［ドイツ最高の女流詩人アネッテ（Annette）・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの実姉］との彼の往復書簡が最もよく認識させるような特徴である。（中略）ヴィルヘルムの場合と同様に彼の性に合った女友達［イェニー］の場合に特徴的に刻印されているのは，初期ビーダーマイヤーの特別な組成におけるロマン主義の特徴である」[65]。

ヴィルヘルムの書き換えたこうしたテクストの特質について，ヒルト（E. Hirt）も次のように述べている。「語り方は，ドイツのメルヘンが冗長な描写に陥ることなく，平易な手段で最も強力な生動性を獲得している様にとって，模範的である。抽象的な要約から場面が生じ，そしてそれが再び要約へと移行する。これによって，重要なものの叙述と，突然の中断なくメルヘン的な時空間

の克服が達せられている。」[66]

かくしてヴィルヘルムは，ヤーコプとアルニム（A. von Arnim）との間の往復書簡の中で論争のあった自然文芸（Naturpoesie）と芸術文芸（Kunstpoesie）の相異[67]を克服するメルヘン形式としての「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)[68]という新しいジャンルを創設したのである。

ちなみに，上述したヴェッセルスキーの提案で，「いばら姫」を例題として，子どもたちがメルヘンをどのように再話（nacherzählen）するかの史上初の実験が，1931年にドイツ系住民の居住する北西ボヘミア地方のコモタウ（Komotau）［現在，チェコ共和国のホムトフ（Chomutov）］の女子高等小学校で行われた。当校の二年生（12～13歳）の半数の女生徒38人に，これまで聞いたり読んだりした「いばら姫」を再話する作文課題が与えられた。この実験の結果 ── このメルヘンの主要部分を書けたのは38人中18人（約47％）に過ぎず，その18人の中でもかなり完全に再話出来たのは僅か５人で，残りの大部分の生徒（72％）は細部で間違っていた ── の詳細はここでは省略するが，この結果を踏まえてヴェッセルスキーは「たとえ単に耳で捉えられているのみならず，印刷され挿絵が付けられて常時手元にあるメルヘンも，再話に際してはしばしば既に最初から散漫になる」[69]として，口伝えによる伝承は不正確に繰り返し再話しているうちに元の話を変えてしまう（zersagen）から，むしろ書物による伝承が重要であるという自説を確認している。

VI

バジーレなどからペローを経てグリム童話の「いばら姫」に至る過程で，次第にエロティックなものは道徳化され，魔術的なものは文芸化されて，全体的に内容的に無害なもの，子ども向きなもの ── ヴィルヘルムの言う「教育の書」(Erziehungsbuch) ── へと洗練されて来ている。特にＫＨＭ初版以後ヴィルヘルムによる絶えざる書き換えによって，民間メルヘンの子どもらしいナイーブな精神に合わせた固有の言葉によって詩的に形成され，いわば新たにそれが音楽にされることによって，このメルヘンに新しい生命が吹き込まれたのである。この意味で既に1920年にハイデン（F. Heyden）はＫＨＭ第七版の「いばら姫」に，「言語音楽におけるメロディー的，リズム的動きと語りの文体の完成された叙事的安らぎ」[70]を指摘している。

また，既述したベーレントゾーンは，ＫＨＭ 50の「いばら姫」は子どもらしい色調で形成されていて，城の雇い人たちの個々の滑稽な特徴［料理番が何かをしくじった見習い小僧の髪をつかんで引っ張ろうとしたが，その手を離して寝てしまい，百年後に目を覚まして，小僧の横っ面を張り飛ばしたので小僧が悲鳴をあげる等］をもって仕上げられている，と述べている[71]。さらにショーフ（W. Schoof）によれば，「子どもらしい色調を適切に表現するというヴィルヘルム・グリムに授けられた才能は，とりわけ「いばら姫」のメルヘンにおいて現れている」[72]という。すなわち，ヴィルヘルムは文学的センスや教育的配慮から，テクストを絶えず念入りに改良して仕上げているのであり，テクスト全体の量も初版で祖稿の２倍，第七版（最終版）で初版の1.5倍（したがって，最終版は祖稿の３倍）になっている。例えば，ＫＨＭ祖稿では「妖精たちは彼女［いばら姫］にあ

らゆる徳と美しさを授けました」[73]となっているのに対して，ＫＨＭ初版では「一人は徳を，もう一人は美しさを，そして残りの者たちも皆，望み得る限りのこの世で願わしく素晴らしいものを残らず贈りました」[74]とヴィルヘルムによって加筆され，さらに第二版以後では「富」が付け加えられ，第七版では「一人は徳を，もう一人は美しさを，三人目は富といった具合に，この世で願わしいものを残らず贈りました」[75]と増幅されている。

これらの記述からも明らかなように，いばら姫は徳（Tugend）と美（Schönheit）の権化であって，その美しさは彼女の無垢（Unschuld）の徳性の表現であり，ギリシア以来の「善美」（kalokagathia）の理想の具現者である。しかし，これは善と美がイコールであるといういわゆる「素朴な美学」なのではなく，道徳的価値は美的価値を含むが，逆は必ずしも真ならずである。例えば，「白雪姫」（ＫＨＭ 53）の継母は外面は美しいが内面は邪悪であり，「灰かぶり」（ＫＨＭ 21）の義理の二人姉妹は「顔は美しくて白いが，心は醜くて真っ黒」（schön und weiß von Angesicht, aber garstig und schwarz von Herzen）であった。したがって集合論的に言えば，善は美のいわば部分集合を成しており，「いばら姫」では美的価値は道徳的価値を強調するのに奉仕している。

初版では単に「プリンセスは（中略）絶世の美人［驚嘆すべき美］（ein Wunder von Schönheit）でありました」[76]となっていて，美しさが特に強調されているのに対して，それ以後の全ての版では「この子は美しくて，しとやかで，親切で，物分かりがよい（schön, sittsam, freundlich und verständig）ので，この子を見た人は誰でも，好きにならずにはいられなかったのでした」[77]と，ヴィルヘルムによって道徳的特性が付加されている。こうした特徴付けは，祖稿にも初版にも見られず，ヴィルヘルムによって第二版から付加されたのであるが，外面的な美に内面的な美である美徳が結び付けられているのであり，ロマインによれば，「こうした内面化され，倫理化された美しさ（verinnerlichte, ethisierte Schönheit）によってこの子は，愛すべき子なのである。それは灰かぶりがただ単に美しいのみならず，とりわけ「敬虔で気立てが良い」（fromm und gut）のと同様である」[78]とされる。

さらに徳は，メルヘンにおいてはアリストテレスの倫理学[79]におけると同様に，幸福（eudaimonia）と直接的に結び付いている。しかし，現実世界では徳が幸福と一致するとは限らない。むしろこの両者は往々にして一致しないのが世の常である。それ故にこそ，メルヘンでは徳が幸福な結果をもたらすという民衆の夢と願望 ── ＫＨＭ第三版（1837年）以後常にＫＨＭの巻頭に置かれた意味深長な文「昔々，まだ人の望みがかなった頃」（In den alten Zeiten, wo das Wünschen noch geholfen hat.）参照 ── が語られ，旧約聖書の「ヨブ記」ではこの一致を死後に期待して彼岸での清算が語られ，またカント（I. Kant）においては，徳と幸福とが厳密に一致することが「純粋実践理性の要請」（Postulat der reinen praktischen Vernunft）[80]とされて，神の存在（Dasein Gottes）を必然化しているのである。

かくしてヴィルヘルムによれば，「そこ［メルヘン］の中に根本（Grund），意義，核心さえもが思うに認められる。ここでは生における神的なものと精神的なものに関する思想が保存されている。すなわち，昔からの信条や教義が，民族の歴史と共に展開する叙事的要素の中へと浸されて，肉付

けされている」[81]［下線部は，原文ではゲシュペルト（隔字体）］のであり，それ故に「これらのメルヘンから良き教え（eine gute Lehre）や，現在への応用が結果として生じるならば，それはこうした性質に基づくのである。それはメルヘンの目的でもなければ，そのためにメルヘンが生み出されたのでもない。けれどもそれは，健やかな花から良い果実が人間の手が加わらずとも生じるように，メルヘンの中から生まれたものである。（中略）それは，どこにも限定されず，全ての地域で，ほとんど全ての人の口に上り，自己変化しながら，忠実に同一の根本（Grund）を守るのである」[82]。このように，メルヘンに内在する教え（Lehre）が生における神的なものと精神的なものに関する思想を含んでいるが故に，ヴィルヘルムはそれを「良き教え」（eine gute Lehre）として特徴付けたのであり[83]，まさにこの点にグリム童話の有する根本的な教育的意味が存在すると言えよう。

最後に，この「いばら姫」メルヘンの絵画について述べておきたい。まず，グリム兄弟の末弟で画家のルードヴィヒ・エーミール・グリム（Ludwig Emil Grimm）がＫＨＭ小版の初版（1825年）に愛すべき挿絵を描いたのを初めとして，その後1857年のベヒシュタイン（L. Bechstein）の「いばら姫」にルードヴィヒ・リヒター（Ludwig Richter）が添えた三枚の有名な挿絵，1869年にジムラー（W. Simmler）が描いた「ドイツ一枚絵124号」（Deutsche Bilderbogen, Nr.124）及びヴィルヘルム・ブッシュ（W. Busch）の絵などが有名であるが，とりわけ注目すべきは，1836年にオイゲン・ナポーレオン・ノイロイター（Eugen Napoleon Neureuther）がミュンヘンで描いた優雅なエッチングである（**図２**参照）[84]。ヴィルヘルム・グリム自身が1843年のＫＨＭ第五版の序文の中で，このエッチングを称賛して，「ノイロイター（ミュンヘン1836年）が作り上げて自らエッチングしたいばら姫の意味深い（sinnreich）大きな銅版画は，この文芸が造形美術に及ぼした感化作用を示している」[85]と述べている。

最近ではマイヤー＝パシンスキー（K. Mayer-Pasinski）がそのモノグラフィーの中で，このノイロイターのエッチングの特質を次のように述べている。「「いばら姫」銅版画においても，優雅に仕上げられた，純粋にゴチック的な建築ファンタジーが存在している。同様に繊細で詩的に紡がれているのが，登場人物たちとそれを縁取る野ばらの薮である。── この銅版画は，この上ない図形的確かさと構図的凝縮によって，メルヘンの魔法的雰囲気の全体を捉えている。」[86]まさに，見る者の心を魅了して止まないこのノイロイターの優雅な銅版画は，19世紀前半のロマン主義の精神に満ちたグリム兄弟の「いばら姫」メルヘンの特徴を的確に図像化していて，一種独特の神秘的な印象を与えている。

註

（１） J. Bolte/G. Polívka, Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Bd. 1 (1931), Olms-Weidmann 1994, S.434.

（２） Vgl. J. Lefftz (Hrsg.), Märchen der Brüder Grimm. Urfassung nach der Originalhandschrift

der Abtei Ölenberg im Elsaß, Carl Winters Universitätsbuchhandlung Heidelberg 1927, S.82f.

(3) KHM. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel mit sämtlichen handschriftlichen Korrekturen der Brüder Grimm sowie einem Ergänzungsheft: Transkriptionen und Kommentare in Verbindung mit U. Marquardt von H. Rölleke. Göttingen 1986/1996 (以下, Handexemplar と略記), Bd.1, S.229.

(4) Vgl. H. Grimm, Die Brüder Grimm. Erinnerungen, in: Deutsche Rundschau LXXXII. März 1895, S.85-100. 特に S. 97.

(5) "Dies scheint gz aus Perrault's Belle au bois dormant", in: J. Lefftz (Hrsg.), a. a. O., S.83. (gz は *ganz* または *gezogen* の略と思われる。)

(6) R. Petsch, Dornröschen und Brynhild, in: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur, 42, 1917, S.80. — Der Pentamerone oder Das Märchen aller Märchen von G. Basilie. Aus dem Neapolitanischen übertr. von F. Liebrecht. Nebst seiner Vorrede von J. Grimm, Breslau 1846. Hildesheim・New York 1973. に付けられたヤーコプ・グリムの序文の XII-XVI 頁, 参照。

(7) R. Petsch, a. a. O., S.96.

(8) R. Petsch, a. a. O., S.97.

(9) Vgl. H. W. Rutgers, Bemerkungen über das Verhältnis von Märchen und Sage, mit besonderer Rücksicht auf die Sigfridsagen, Groningen 1923, S.69.

(10) A. Wesselski, Versuch einer Theorie des Märchens, Reichenberg i. B. 1931, Hildesheim 1974, S.179.

(11) H. Rölleke, Die 'stockhessischen' Märchen der 'Alten Marie'. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm, in: Germanisch-Romanische Monatsschrift. N.F.25 (1975), S.74-86.

(12) Vgl. Die Grimm'schen Märchen der jungen Marie. Arrangiert und ausgeschmückt von A. Schindehütte, Marburg 1991.

(13) Perceforest: ed. crit./ par Gilles Roussineau, Geneve: Droz 1987.

(14) H. Rölleke, Die Stellung des Dornröschen-Märchens (KHM 50) zum Mythos und zur Heldensage (1984), in: Ders., Die Märchen der Brüder Grimm — Quellen und Studien. Gesammelte Aufsätze, Trier 2000, S.163.

(15) 西洋では昔, 黄道上の太陽が約一カ月の間一つの宮に滞在しては次の宮に移り, 十二カ月で一巡りすると考えた。十二宮の名前は順に, 白羊宮 (Aries), 金牛宮 (Taurus), 双児宮 (Gemini), 巨蟹宮 (Cancer), 獅子宮 (Leo), 処女宮 (Virgo), 天秤宮 (Libra), 天蝎宮 (Scorpio), 人馬宮 (Sagittarius), 磨羯宮 (Capricornus), 宝瓶宮 (Aquarius), 双魚宮 (Pisces)。

(16) R. Geiger, MÆRCHENKUNDE. Mensch und Schicksal im Spiegel der Grimmschen

Maerchen, Stuttgart 1998[4], S.526.

(17) Vgl. Ph. Stauff, Märchendeutungen. Sinn und Deutung der deutschen Volksmärchen, Leipzig 1921[2], S.26.

(18) A. Romain, Zur Gestalt des Grimmschen Dornröschenmärchens, in: Zeitschrift für Volkskunde, Bd.42, 1933, S.91.

(19) H. Rölleke, a. a. O., S.166.

(20) W. A. Berendsohn, Grundformen volkstümlicher Erzählerkunst in den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Ein stilkritischer Versuch (1921), Vaduz 1993, S.67.

(21) W. Scherf, Das Märchenlexikon, Bd.1, C. H. Beck 1995, S.173.

(22) U. Diederichs, Who's who im Märchen, München 1995, S.64.

(23) 著者保存本(註3参照)第1巻の見返しの右頁に，ヴィルヘルムの自筆で「註は共同で」("Die Anmerkungen gemeinschaftlich.") という書き込みがある。

(24) KHM初版第1巻，1812年，Handexemplar, Bd.1, S.LVI.

(25) Originalanmerkungen der Brüder Grimm, in: KHM (Ausgabe Letzter Hand), hrsg. v. H. Rölleke, Stuttgart 1980/1993, Bd.3, S.281.

(26) Vgl. Die wahren Märchen der Brüder Grimm, hrsg. v. H. Rölleke, Fischer Taschenbuch 1989, S.274.

(27) "(18. April 1811 von Hassenpflugs)", in: Handexemplar, Bd.1, S.385.

(28) Handexemplar, Bd.2, S. VI ff. 著者保存本第2巻の見返しの右頁に，ヴィルヘルムの自筆で「序文はヴィルヘルム」("Die Vorrede von Wilhelm.") という書き込みがある。

(29) Vgl. Lieder der alten Edda. Aus der Handschrift herausgegeben und erklärt durch die Brüder Grimm. Erster Band. Berlin 1815.(この貴重な文献のマイクロ・フィルムを筆者の依頼で作製されたチュービンゲン大学図書館に感謝する。)
この中の巻末の散文訳(全69頁)は，ホッフォリー(J. Hoffory)の1885年の言によれば，「疑いもなく凡そ存在する中で最も美しいのみならず，精神の点でも最も忠実なものである。(中略)グリムの翻訳は，原文の特性と美しさについて生き生きとしたイメージを読者に与えることが出来る唯一のものである」。(Vgl. Lieder der alten Edda. Deutsch durch die Brüder Grimm. Neu hrsg. v. Dr. Julius Hoffory, Berlin 1885, S.XIIf.)

(30) Handexemplar, Bd.1, S.XXXI.

(31) "Die Spindel woran es sich stich=dem Schlafdorn, womit Odin die Brünhild sticht." in: A. a. O., S.XXXI.

(32) Aus dem Anmerkungsband von 1822, in: H. Rölleke (Hrsg.), KHM (3. Ausgabe von 1837), Frankfurt/Main 1985, S.945.

(33) 邦訳は、『エッダ — 古代北欧歌謡集』(谷口幸男訳，新潮社，1973年，143-144頁)を，一部誤訳の修正を含めて適宜変更した。独訳は，Vgl. Die Edda. Götterdichtung, Spruchweisheit

und Heldengesänge der Germanen / übertr. v. F. Genzmer. Eingeleitet v. K. Schier, Kreuzlingen/München 1997[4], S.263.

(34) R. Spiller, Zur Geschichte des Märchens vom Dornröschen. Progr. d. Thurgauischen Kantonschule, Frauenfeld 1893.

(35) "Little Surya Bai", in: Old Deccan Days or Hindoo Fairy Tales collected from oral tradition by Mary Frère. London, 3. Edition, 1881.

(36) R. Spiller, a. a. O., S.34. — Vgl. Nordische Nibelungen. Die Sagas von den Völsungen, von Ragnar Lodbrok und Hrolf Kraki. Aus dem Altnordischen übertr. v. P. Herrmann, Köln 1985.

(37) Vgl. F. Vogt, Dornröschen — Thalia, in: Beiträge zur Volkskunde: Festschrift Karl Weinhold, Breslau 1896. Olms-Weidmann 1977, S.195-237.

(38) Vgl. H. W. Rutgers, Bemerkungen über das Verhältnis von Märchen und Sage, a. a. O., S.72-78.

(39) G. Siefert, Wer war Siegfried?, in: Beilage zur Allgemeinen Zeitung, Jg.1905, Nr.33, S.261.

(40) Vgl. F. Panzer, Märchen, Sage und Dichtung, München 1905.

(41) R. Petsch, Dornröschen und Brynhild, a. a. O., S.90f.

(42) R. Petsch, a. a. O., S.92.

(43) H. W. Rutgers, a. a. O., S.83.

(44) J. Bolte/G. Polívka, Anmerkungen zu …, a. a. O., S.441.

(45) J. de Vries, Dornröschen, in: Fabula 2, 1958, S.118.

(46) 『エッダ』上掲書，154-155頁。Die Edda, a. a. O., S.224.

(47) J. de Vries, a. a. O., S.120.

(48) G. Basile, Der Pentamerone, a. a. O., S.197. バジーレ作，杉山洋子・三宅忠明訳『ペンタメローネ』大修館書店，1995年，422頁。

(49) J. de Vries, a. a. O., S.120f.

(50) Vgl. J. de Vries, Betrachtungen zum Märchen, besonders in seinem Verhältnis zu Heldensage und Mythos, Helsinki 1954, 1967[2], S.99. — Vgl. Ders., Über keltisch-germanische Beziehungen auf dem Gebiete der Heldensage, in: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur, 75, 1953, S.243f.
ちなみに，フォン・デァ・ライエン（F. von der Leyen）も，「我々はこうした豊富な類似性を顧慮して，我々のいばら姫メルヘンは古いゲルマン＝ケルトの文学から由来している，と主張して多分よいであろう」と述べている（Vgl. F. von der Leyen, Das deutsche Märchen und die Brüder Grimm, Düsseldorf/Köln 1964, S.321.）。

(51) 田中仁彦『ケルト神話と中世騎士物語』中央公論社，1998年　6版，参照。

(52) J. de Vries, Betrachtungen zum Märchen …, a. a. O., S.110.

(53) J. de Vries, Dornröschen, a. a. O., S.121.

(54) A. Wesselski, Versuch einer Theorie des Märchens, a. a. O., S.58.

(55) J. de Vries, Betrachtungen zum Märchen …, a. a. O., S.173.

(56) H. Rölleke, Die Stellung des Dornröschen-Märchens (KHM 50) zum Mythos und zur Heldensage, a. a. O., S.165.

(57) H. Rölleke, a. a. O., S.167.

(58) H. Rölleke, a. a. O., S.167. — Vgl. Ders., Die Märchen der Brüder Grimm, Bonn・Berlin 1992[3], S.96f.

(59) M. Lüthi, Märchen, Stuttgart・Weimar 1996[9], S.85.

(60) 拙論「J.M.エリスのグリム批判とその問題点 — グリム童話(KHM)研究の解釈学的,教育学的視点 — 」,『九州大学大学院教育学研究紀要』第二号(通巻 第45集),2000年、93-112頁。

(61) J. Bolte/G. Polívka, a. a. O., S.441.

(62) "Hamiltons pur erfundene frz. fleur depine hängt nirgends am alten Märchen.", in: Handexemplar, Bd.1, S.XXXI.

(63) Vgl. H. Rölleke, Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm, Cologny-Genève 1975, S.359.

(64) A. Romain, Zur Gestalt des Grimmschen Dornröschenmärchens, a. a. O., S.95.

(65) A. Romain, a. a. O., S.108f. — Vgl. Briefwechsel zwischen Jenny von Droste-Hülshoff und Wilhelm Grimm, hrsg. v. K. Schulte-Kemminghausen, Münster Westfalen 1978.

(66) E. Hirt, Das Formgesetz der epischen, dramatischen und lyrischen Dichtung, Leipzig u. Berlin 1923, Hildesheim 1972, S.62.

(67) Vgl. Achim von Arnim und Jacob und Wilhelm Grimm. Bearbeitet v. R. Steig (1904), Bern 1970, S.115-144.

(68) 拙論「「グリムのジャンル」(Gattung Grimm)の形成とその特質 — グリム童話集(KHM)の美的教育学的次元 — 」,『九州大学大学院教育学研究紀要』創刊号(通巻 第44集),1999年、243-264頁,参照。

(69) A. Wesselski, Versuch einer Theorie des Märchens, a. a. O., S.131.

(70) F. Heyden, Poesie und Sprachmusik im Volksmärchen, in: Deutsches Volkstum, 22 (1920), S.151.

(71) Vgl. W. A. Berendsohn, Grundformen …, a. a. O., S.67.

(72) W. Schoof, Zur Geschichte des Grimmschen Märchenstils, in: Der Deutschunterricht, Bd.15, Heft 2, 1963, S.92.

(73) J. Lefftz (Hrsg.), Märchen der Brüder Grimm, a. a. O., S.83.

(74) Handexemplar, Bd.1, S.225.

(75) KHM (Ausgabe Letzter Hand), a. a. O., Bd.1, S.257.

(76) Handexemplar, Bd.1, S.226.

(77) KHM (2. Ausgabe von 1819), hrsg. v. H. Rölleke, München 1982, 1992[6], S.177.

(78) A. Romain, a. a. O., S.103.

(79) アリストテレス著，高田三郎訳『ニコマコス倫理学』(上)，岩波文庫，1971/1975年，参照。

(80) Vgl. I. Kant, Kritik der praktischen Vernunft, [222ff.], hrsg. v. J. Kopper, Philipp Reclam Jun. 1961/1986, S.197ff. 波多野精一，宮本和吉訳『実践理性批判』岩波文庫，1927/1963年，180頁以下，参照。

(81) Einleitung. Über das Wesen der Märchen, in: W. Grimm, Kleine Schriften 1 (1881). Nach der Ausgabe von G.Hinrichs neu hrsg. v. O. Ehrismann, Olms-Weidmann 1992, S.338.

(82) Handexemplar, Bd.1, S.XIIf.

(83) Vgl. W. Solms, Die Moral von Grimms Märchen, Darmstadt 1999.

(84) 原画（フォリオ判）は，カッセルのグリム兄弟博物館（Brüder Grimm-Museum Kassel）に所収（Graph. Z 170 2°）。

(85) KHM (Ausgabe Letzter Hand), a. a. O., Bd.1, S.26.

(86) K. Mayer-Pasinski, Eugen Napoleon Neureuther als Märchenillustrator, in: Jahrbuch der Brüder Grimm-Gesellschaft, Bd.V, 1995, S.146.

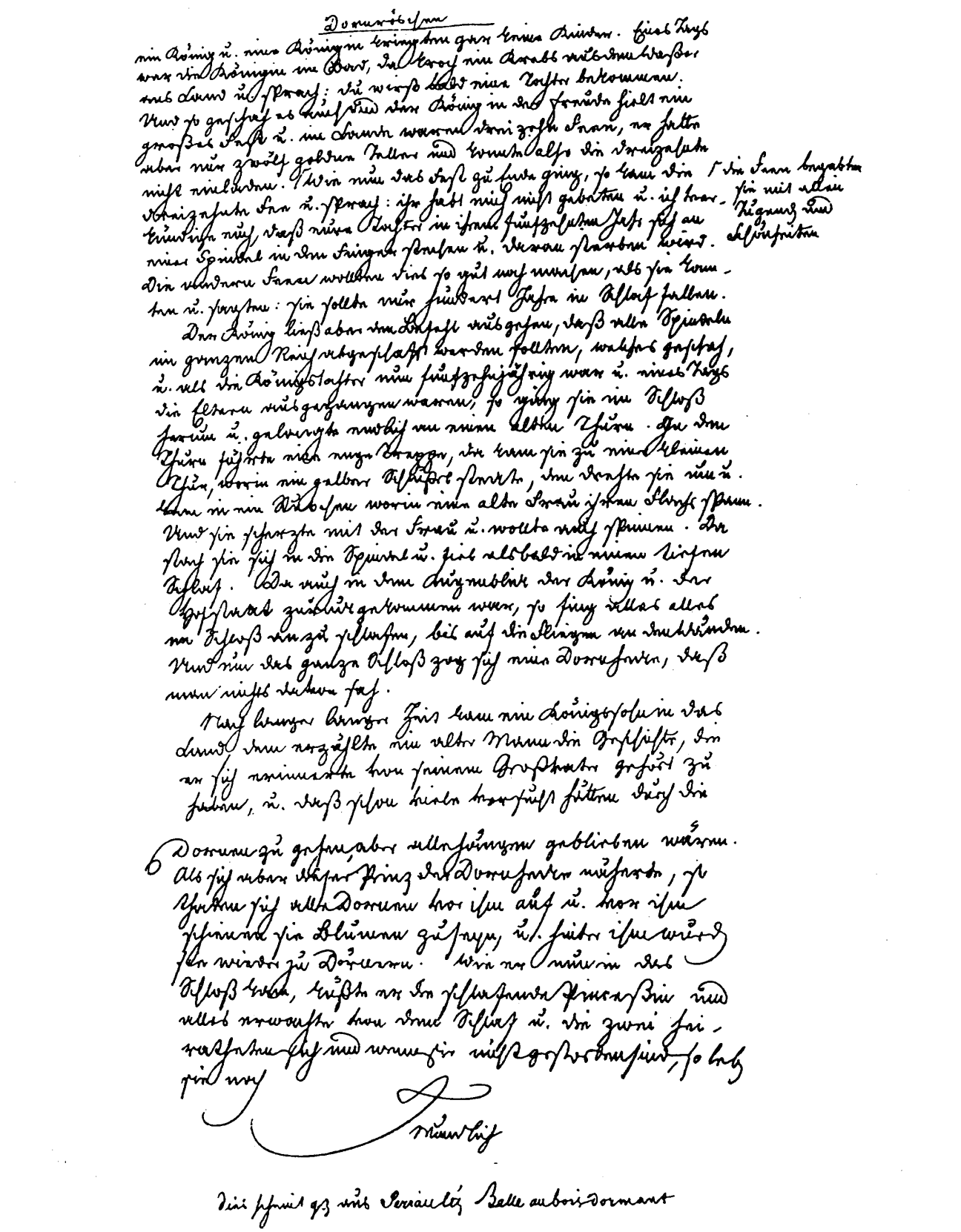

図 1

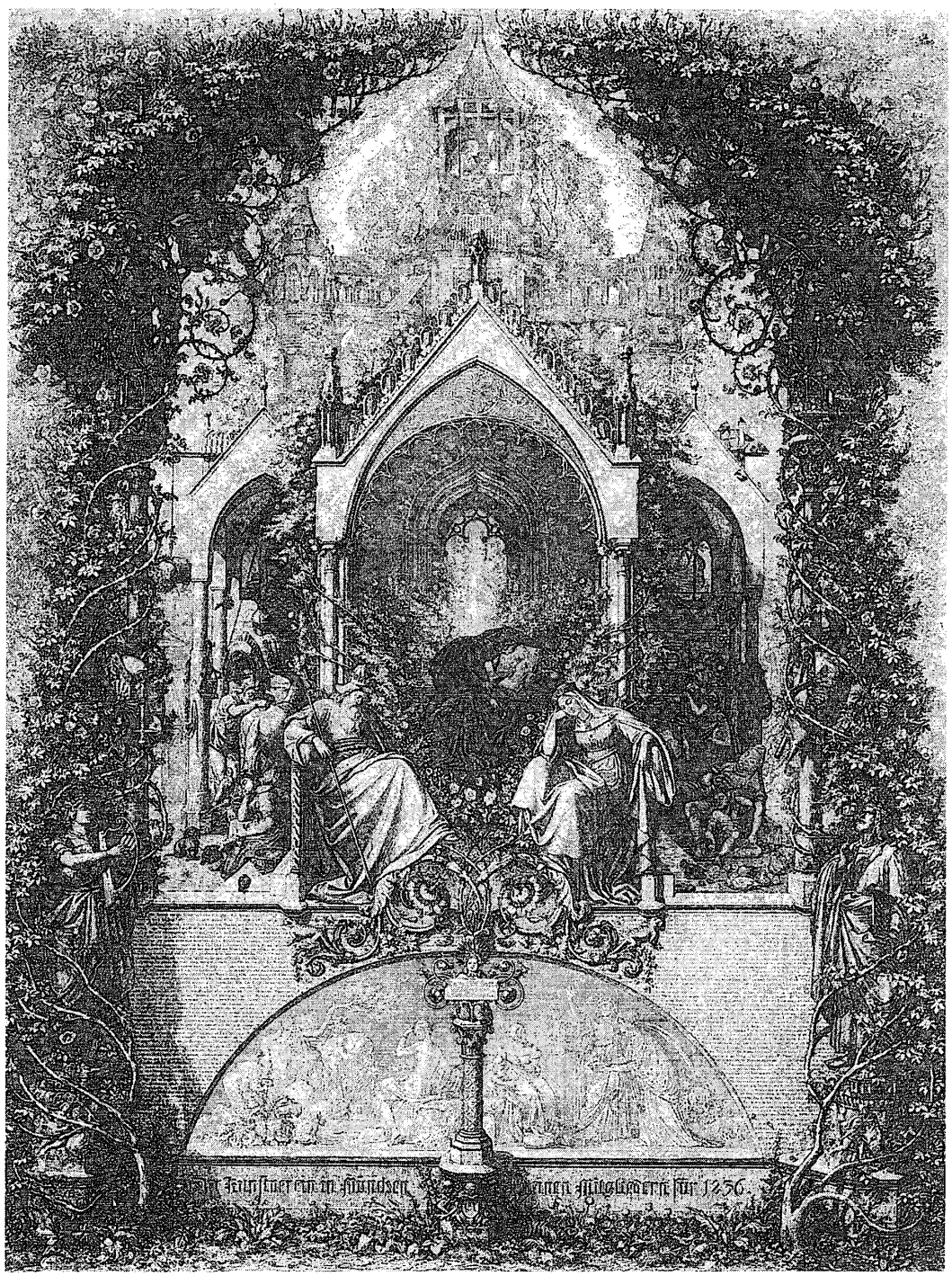

図 2

Über die Deutungen von Grimms Dornröschen-Märchen (KHM 50)
— seine philologisch-pädagogische Betrachtung —

Hideakira Okamoto

Das so bekannte und geliebte Dornröschen-Märchen von Brüdern Grimm ist zwar sehr kinderfreundlich, aber gar nicht leicht zu deuten. Die Forschungen haben lange an der vagen Erinnerung Herman Grimms (dem Sohn Wilhelm Grimms), daß "Marie", die Jacob Grimm dieses Märchen übermittelte, die stockhessische "Alte Marie" sei, so starr festgehalten, daß sie das Dornröschen-Märchen als eine urdeutsche Volkserzählung mißverstanden und es gelegentlich für älter als die romanischen Fassungen von Perrault, Basile u. a. gehalten haben. Die aus diesen Mißverständnissen folgenden heiklen Probleme werden hier zuerst erörtert.

Zweitens: Die Forscher haben sich durch die uralten mythischen Motive dieses Dornröschen-Märchens vor allem mit seiner Entstehung und seinem Ursprung beschäftigt. Schon sahen die Brüder Grimm in dem schlafenden Mädchen, das von einer Dornenhecke umgegeben war, die in der altgermanischen 'Edda' von Odins Schlafdorn in Zauberschlaf versetzte Brynhild, die ein Flammenwall umgibt, durch den Sigurd dringt und sie aufweckt. Die recht vielseitig divergierenden Diskussionen von R. Spiller, F. Vogt, G. Siefert, F. Panzer, R. Petsch, H. W. Rutgers, J. de Vries, H. Rölleke usw. für oder gegen die direkte Filiation und die Prioritäten oder Abhängigkeiten in bezug auf 'Dornröschen' und 'Edda' werden hier auch in Betracht der keltisch-germanischen Beziehungen eingehend untersucht.

Drittens: Wilhelm Grimm hat durch die ihm eigene Gabe, den Weg zum Herzen des Kindes zu finden, das Dornröschen-Märchen kindlich im Ton mit leichten schwankhaften Einzelzügen bearbeitet, und darin vollendet sich nach A. Romain auch die klanglich-rhythmische Einheit. Weiter in den Märchen sind es nach Wilhelm Grimm die Gedanken über das Göttliche und Geistige im Leben aufbewahrt: "In diesen Eigenschaften aber ist es gegründet, wenn sich so leicht aus diesen Märchen eine gute Lehre, eine Anwendung für die Gegenwart ergiebt; …"

Weil die in den Märchen enthaltene Lehre gerade der Gedanke über das Göttliche und Geistige d. h. eine gute Lehre ist und das Dornröschen-Märchen vor allem den rechten kindlichen Ton trifft, liegt eben darin die grundlegende pädagogische Bedeutung dieses Märchens.